

社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

<p>代表者氏名 (ふりがな)</p>	<p>溝上慎一 (みぞかみしんいち)</p>	<p>所属</p>	<p>京都大学高等教育研究開発推進センター</p>
<p>研究集会等名称</p>	<p>社団法人日本心理学会 自己意識研究会</p>		
<p>成果概要</p>	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 20 名 (うち認定心理士 3 名) 非会員 5 名 (うち認定心理士 0 名) *一般の方にも公開していますので、平均的な数を記入しています。</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>■実施内容 助成期間に以下 3 回の催しを行った。 第 54 回 2010 年 12 月 18 日 小松孝至氏 (大阪教育大学教育学部) 報告 「「他者が感じ取る」ものとしての「自己」 — presentational self という考え方の提案」 第 55 回 2011 年 1 月 22 日 佐藤徳氏 (富山大学人間発達科学部) 報告 「自己を自己たらしめる感覚はいかに成立するか？」 第 56 回 2011 年 2 月 20 日 James Côté (Western Ontario 大学、カナダ) 招聘国際シンポジウム (京都大学高等教育研究開発推進センターとの共催) 「学校から仕事へのトランジション—学校教育における自己形成の到来」</p> <p>■成果 自己に関する最先端の取り組みを行っている研究者を招聘し、報告をもとに質疑等議論を重ねられたのは、大きな成果である。小松氏の幼児期における “Presentational Self”、Côté 氏の “Identity Capital” という新しい考え方は、研究会の参加者にとって刺激的であった。また、佐藤氏の社会心理学の実験的成果、脳・神経科学を踏まえた自己の感覚の説明などは、参加者の関心領域を越える新しい知識であり、活発に意見交換がなされた。</p> <p>■将来計画 ・近年、自己の心理学研究は、認知・社会・乳幼児発達心理学や脳神経科学などで発展しており、どちらかと言えば、人格や青年期以降の発達心理学では下火の感が強い。しかしながら、このことは課題がないことを意味するわけではない。本研究会の参加者の多くは人格や青年期以降の発達領域に関心を寄せる者であるから、今後とも引き続き、他の心理学領域に於ける自己研究の最新の成果を学びながら、参加者の取り組む研究課題を発展させていきたいと考えている。 →H23 年度は、外部講師だけでなく、会員の発表も少し交えていきたいと考えている。</p>		